曖昧さに対する態度と抑うつに関連性の素因ストレスモデルによる検討[†]

友野 隆成

宮城学院女子大学学芸学部心理行動科学科

キーワード：曖昧さへの態度、対人ストレス、素因ストレスモデル、抑うつ

(ストレス科学研究 2015, 30, 162-166)

Abstract

This study examined whether attitudes towards ambiguity and interpersonal stress events in a diathesis-stress model predicted changes in depression. Sixty-seven female college students were asked to answer the Attitudes Towards Ambiguity Scale (ATAS), and the Zung Self-Rating Depression Scale (SDS). After one month, they were asked to complete the Scale of Interpersonal Stressor (SIS), and SDS. We measured SDS twice in order to investigate residual change of depression. Hierarchical multiple regression analysis showed that the interaction term of negative attitudes toward ambiguity and interpersonal friction significantly predicted changes in depression. Simple slope analysis showed that participants who did not have negative attitudes toward ambiguity and experienced a higher degree of interpersonal friction showed significantly lower reductions in depression scores than those who experienced a lower degree of interpersonal friction. But the other interaction terms were not significant. These results suggest that the diathesis-stress model was not supported and that attitudes towards ambiguity were not sufficient to consider as a diathesis for depression.

Keywords: attitudes towards ambiguity, interpersonal stress, diathesis-stress model, depression

1. 問題と目的

抑うつ悪化のメカニズムを説明するモデルの1つに、素因ストレスモデル¹⁾がある。このモデルは、ネガティブなストレスイベントを経験した際に、抑うつに対する素因をもつ個人がもたない個人と比較して、より抑うつに陥り易いことを実証したものである。

このモデルでは、抑うつに対する素因として、経験したストレスに持続性があり、多くの結果に悪影響を及ぼすと考える傾向である「ネガティブな帰属スタイル」が主に取り上げられ、ネガティブなストレスイベ

ントとの交互作用が抑うつの悪化を予測することが示されてきた²⁾⁴⁾。一方、帰属スタイルのみならず、その他の変数を抑うつに対する素因とみなし、素因ストレスモデルを検討した研究もいくつか見受けられる。例えば、「完全主義⁵⁾」、「自己没入傾向⁶⁾」、「自己犠牲⁷⁾」、「曖昧さへの非寛容⁸⁾」、「対人場面における曖昧さへの非寛容⁹⁾」などである。これらの研究において、いずれの変数においても交互作用効果が示されたことから、素因ストレスモデルの有効性および拡張の可能性が示唆される。

本研究では、抑うつに対する素因になり得る変数として、「曖昧さへの態度」を取り上げる。「曖昧さへの

Diathesis-stress model for relationship between attitudes towards ambiguity and depression

Takanari Tomono

Department of Psychological and Behavioral Science, Faculty of Liberal Arts, Miyagi Gakuin Women's University

[†] 本研究は、東北心理学会第67回大会で発表された内容の一部を再分析・再構成したものである。

態度」は、「曖昧な刺激の処理に応じて生じる、認知的、情緒的反応パターン」と定義されており¹⁰⁾、個人が曖昧さに直面した際に、その曖昧さに対してどのような評価を行うかなどを包括した多次元的な概念である。具体的には、「曖昧さへの不安や排除」など、「曖昧さに対する否定的な態度」のみならず、「曖昧さの享受や受容」など、「曖昧さに対する肯定的な態度」も想定したものとなっている¹⁰⁾。

「曖昧さへの態度」と「抑うつ」の関連性については、西村¹⁰⁾によって検討されている。この研究において、「曖昧さへの態度」の下位概念である「曖昧さへの不安」と「抑うつ」との間に有意な正の関連性があることが示されたことから、「曖昧さへの否定的態度」は抑うつの素因となり得ることが仮定される。一方、「曖昧さへの肯定的態度」と「抑うつ」との間には有意な相関関係が示されなかったため、「曖昧さへの肯定的態度」は抑うつの素因にならないことが仮定される。なお、ストレスイベントのうち対人関係に関するものが抑うつの予測に大きく寄与していることが示唆されているため¹¹⁾、本研究では「対人ストレスイベント」をストレスサーとして取り上げる。以上のことを踏まえ、本研究では「曖昧さへの態度」を肯定的態度と否定的態度に分け、それぞれ素因ストレスモデルを用いて因果関係の検討を行うことを目的とする。本研究の仮説は、次の2点である。(1)「曖昧さへの否定的態度」と「対人ストレスイベント」との交互作用は「抑うつ」の増大を予測する。(2)「曖昧さへの肯定的態度」と「対人ストレスイベント」との交互作用は「抑うつ」の増大を予測しない。

2. 方 法

2.1 調査協力者および調査時期

S市内の4年制女子大学に在籍している女子大学生を対象に2回の調査を実施し、両調査とも回答に不備の無かった67名を分析対象とした。平均年齢は18.88歳($SD=0.80$ 歳)であった。調査時期は、第1回目の調査(時点1)が2012年5月上旬であり、第2回目の調査(時点2)が約1ヶ月後の2012年6月上旬であった。

2.2 測度

2.2.1 曖昧さへの態度

西村¹⁰⁾による、曖昧さへの態度尺度を用いた。この尺度は、全26項目から構成されており、「曖昧さの享受」「曖昧さへの不安」「曖昧さの受容」「曖昧さの統制」「曖昧さの排除」の5下位尺度からなる。本研究では、各項目について調査協力者にそれぞれどの程

度あてはまるか1(まったくあてはまらない)から6(非常にあてはまる)までの6件法で回答を求め、友野と鹿内¹²⁾同様「曖昧さの享受」と「曖昧さの受容」を合計して“曖昧さへの肯定的態度(項目例:いろいろな可能性がある、すべてを試してみたいくなる。)”、「曖昧さへの不安」と「曖昧さの統制」および「曖昧さの排除」を合計して“曖昧さへの否定的態度(項目例:はっきりしない状況ではどうしたらいいかわからなくなる。)”として用いた(曖昧さへの肯定的態度: $\alpha=.79$, 曖昧さへの否定的態度: $\alpha=.76$)。

2.2.2 対人ストレスイベント

橋本¹³⁾による、対人ストレスサー尺度を用いた。この尺度は、全18項目から構成されており、「対人葛藤」6項目(項目例:あなたの意見を相手が真剣に聞こうとしなかった。),「対人過失」6項目(項目例:あなたの落ち度を、相手にきちんと謝罪・フォローできなかった。),「対人摩擦」6項目(項目例:あなたのあからさまな本音や悪い部分が出ないように気を使った。)の3下位尺度からなる。本研究では、調査協力者の身の回りのさまざまな人々(友人や知人、家族や恋人、学校の先生、仕事やアルバイトの同僚や上司など)とのあいだで、最近およそ1ヶ月のあいだ、各項目に示されたできごとを調査協力者がどのくらい経験したか、それぞれ1(まったくなかった)から4(しばしばあった)までの4件法で回答を求め、下位尺度ごとに項目の合計得点を算出して用いた(対人葛藤: $\alpha=.74$, 対人過失: $\alpha=.76$, 対人摩擦: $\alpha=.77$)。

2.2.3 抑うつ

Zung¹⁴⁾による自己評価式抑うつ性尺度(Self-Rating Depression Scale: SDS)の日本語版¹⁵⁾を用いた。この尺度は、全20項目(項目例:気が沈んで憂うつだ)からなる。本研究では、各項目について調査協力者が現在の程度あてはまるか、それぞれ1(ない、たまに)から4(ほとんどいつも)までの4件法で回答を求め、全項目の合計得点を算出して用いた(時点1抑うつ: $\alpha=.75$, 時点2抑うつ: $\alpha=.82$)。

2.3 実施方法および倫理的配慮

調査は、授業時間の一部を用いて実施された。2回の調査とも、以後に示す手順と同様に行われた。質問紙の配布後、添付された本研究の趣旨説明に関する書面に加え、口頭でも本研究の趣旨が説明された。質問紙への回答に同意した調査協力者は、調査参加に対する同意書に署名を行った。そして、2回の調査の回答を照合するための、アルファベットと数字を組み合わせた調査参加IDを設定した。その後その場で質問紙に回答し、回答終了後は授業時間内に提出することが求められた。回答はそれぞれ約10分程度を要した。

Table 1 抑うつの変化に関する階層的重回帰分析

ステップ	投入された変数	R ²	ΔR ²	F	p for ΔR ²	pr
1	時点1 抑うつ	.622	.622	106.80	.000	.77
2	対人摩擦	.638	.017	1.46	.240	.09
	否定的態度					.17
3	交互作用	.661	.023	4.21	.044	-.25

否定的態度 = 曖昧さへの否定的態度

また、回答の確認や訂正、本研究の目的や結果に関する問い合わせ、もしくは調査参加の取り止めを求める場合、合理的な範囲でこれらを実行する権利が保証されている旨が、同意書の冒頭文面および口頭で調査協力者に併せて伝えられた。さらに、回答済みの質問紙と同意書は、回収後に回答を全て匿名化した後に切り離し、別々の場所に保管された。時点1では曖昧さへの態度尺度、SDSが、時点2では対人ストレス尺度およびSDSが、それぞれ実施された。なお、時点1において対人場面における曖昧さへの非寛容尺度¹⁶⁾も実施されたが、以後の分析からは除外された。

3. 結 果

3.1 階層的重回帰分析

「曖昧さへの態度」と「対人ストレス」の交互作用がそれぞれ抑うつの増大を予測するかどうか検討するために、時点2の「抑うつ」得点を基準変数とした階層的重回帰分析を、MetalskyとJoiner³⁾および丹野¹⁷⁾を参考にして行った。分析に先立ち、交互作用項を形成する2つの変数を、それぞれの平均値からの偏差に換算するセンタリングを実施した¹⁸⁾。この手続きは、多重共線性の危険性を低減するために実施されるものである。

その結果、「曖昧さへの否定的態度」において、「対人摩擦」との有意な交互作用効果がみられた (Table 1)。なお、その他の交互作用の組み合わせはいずれも有意ではなかった (ΔR^2 s = .001 ~ .014, *n.s.*)。

引き続き、有意であった交互作用効果が具体的にどのようなものであるかを明らかにするために、CohenとCohen¹⁸⁾の手続きに従い単回帰直線を求めた。本研究では、時点2の「抑うつ」得点を基準変数とする回帰方程式に、時点1における「抑うつ」得点の平均と、「曖昧さへの否定的態度」得点および「対人摩擦」得点のそれぞれ平均±1SDを代入した。この手続きによって、交互作用項を形成する2変数の高低の組み合わせでそれぞれの得点の変化量が算出され、得られた交互作用の様相が明らかとなる。

Figure 1に、上述の手続きによって得られた単回帰

Figure 1 曖昧さへの否定的態度と対人摩擦の交互作用

直線を示す。「曖昧さへの否定的態度」得点の平均+1SDに関する単回帰直線は、「対人摩擦」得点の平均±1SDにかかわらず、時点1に比べて時点2での「抑うつ」得点が増大する傾向がみられた ($pr = -.25$, $p < .05$)。単純傾斜検定の結果、「曖昧さへの否定的態度」得点の平均+1SDにおける「対人摩擦」の単純傾斜は有意ではなかった ($b = -.26$, $\beta = -.12$, $t = -1.00$, *n.s.*)。一方、「曖昧さへの否定的態度」得点の平均-1SDに関する単回帰直線は、「対人摩擦」得点の平均±1SDにかかわらず、時点1に比べて時点2での「抑うつ」得点が減少する傾向がみられた ($pr = -.25$, $p < .05$)。単純傾斜検定の結果、「曖昧さへの否定的態度」得点の平均-1SDにおける「対人摩擦」の単純傾斜は5%水準で有意であり ($b = .50$, $\beta = .24$, $t = 2.11$, $p < .05$)、「曖昧さへの否定的態度」得点の平均-1SDと「対人摩擦」得点の平均+1SDの組み合わせの場合は「対人摩擦」得点の平均-1SDの組み合わせの場合と比べて、「抑うつ」得点の減少が相対的に少ないことが示された。

4. 考 察

本研究では、「曖昧さへの態度」と、対人関係に関するストレスイベントとの交互作用が抑うつの増大を予測するかどうか、素因ストレスモデルによって検討した。その結果、「曖昧さへの否定的態度」に関する交互作用が一部有意となったが、そのパターンは素因

ストレスモデルで仮定されているものとは異なっていた。一方、「曖昧さへの肯定的態度」に関する交互作用はいずれも有意ではなかった。

4.1 曖昧さへの否定的態度に関する素因ストレスモデルについて

「曖昧さへの否定的態度」と「対人葛藤」若しくは「対人過失」との交互作用は、「抑うつ」の増大を予測せず、「曖昧さへの否定的態度」と「対人摩擦」との交互作用のみが有意となった。しかし、「曖昧さへの否定的態度」と「対人摩擦」との交互作用効果は、素因ストレスモデルの枠組で仮定された交互作用のパターンとは異なっていた。以上のことから、仮説 (1) は支持されなかった。

対人摩擦は、社会規範から逸脱するような個人間ストレスが生じるようなものではないが、他者への配慮や気疲れのような個人内ストレスが生じるような事態であることが示唆されている¹⁹⁾。また、現代青年の友人関係は希薄なものとなり、できるだけ友達を傷つけないよう気を遣う傾向があることも示唆されている²⁰⁾。これらのことから、他者に気を遣うような出来事を多く経験した場合、曖昧さに否定的な態度をもたない者であっても、他者に気を遣うような出来事を経験しなかった場合に比べて消耗してしまうのかもしれない。但し、2 時点間の比較では曖昧さに否定的な態度をもたない者の抑うつ得点は他者に気を遣うような出来事を多く経験した場合であっても最終的には減少しているので、曖昧さへの否定的な態度の低さは抑うつに対する緩衝要因であるという見方も可能であろう。

一方、曖昧さに否定的な態度をもつ者は、他者に気を遣うような出来事の経験の多寡にかかわらず抑うつが増大することが示された。素因ストレスモデルの枠組を当てはめて考えると、曖昧さに否定的な態度をもつ者が他者に気を遣うような出来事を多く経験すると抑うつが増大するが、他者に気を遣うような出来事を経験しなければ抑うつは増大しないことが仮定される。しかし、本研究では、他者に気を遣うような出来事をほとんど経験しなくとも、曖昧さに否定的な態度をもつ者は抑うつが増大しており、その水準は他者に気を遣うような出来事を多く経験した場合と同等であった。曖昧さに非寛容な女性は直截的に行動する傾向がある²¹⁾ことを踏まえると、本研究に参加した曖昧さに否定的な態度をもつ者は、一般的に他者に気を遣うような場面であっても他者に気を遣わずはっきりとした言動をとるため、主観的には経験が無いものとみなして対人ストレス尺度に回答したのかもしれない。今後、この点について詳細に検討する必要があるように思われる。

4.2 曖昧さへの肯定的態度に関する素因ストレスモデルについて

「曖昧さへの肯定的態度」と「対人ストレスイベント」の交互作用は、いずれの組み合わせにおいても「抑うつ」の増大を予測せず、仮説 (2) は支持された。

本研究で用いた曖昧さへの態度尺度は、特定の状況の特徴が回答に影響することを避けるため、曖昧さが生じる状況の抽象度を高めた項目内容となっている¹⁰⁾。このことは、曖昧さが生じる状況を言わば投影法的に調査協力者に想起させる可能性が考えられる。その結果、人によって想起する曖昧さの領域が多岐に渡り、有意な交互作用効果が得られなかったのかもしれない。

4.3 本研究の問題点と今後の課題について

本研究では女子大学生のみを調査対象とし、男子大学生およびその他の年齢層については検討しなかった。また、サンプルサイズも小さかったため、結果の一般化には慎重であらねばならない。今後、適切なサンプルサイズを確保したうえで男性および異なる年代についても測定し、本研究で得られた知見と比較検討を行う必要があると考えられる。

謝 辞

本研究は、平成 24 ～ 26 年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（若手研究（B））研究代表者 友野隆成、課題番号 24730588）および 2011 年度宮城学院女子大学特別研究助成「特別研究費」の助成を受けた。本研究の実施に当たり、宮城学院女子大学人文科学研究科 2013 年度修士の鹿内美冴氏から、多大なるご協力を得た。また、複数回にわたる調査にご協力いただいた皆様に、深謝申し上げる。

文 献

- 1) Metalsky, G. I., Halberstadt, L. J., Abramson, L. Y., Vulnerability to depressive mood reactions: Toward a more powerful test of the diathesis-stress and causal mediation components of the reformulated theory of depression. *Journal of Personality and Social Psychology* 52, 386-393, 1987.
- 2) Alloy, L. B., Just, N., Panzarella, C., Attributional Style, Daily Life Events, and Hopelessness Depression: Subtype Validation by Prospective Variability and Specificity of Symptoms. *Cognitive Therapy and Research* 21, 321-344, 1997.
- 3) Metalsky, G. I., Joiner, T. E., Vulnerability to depressive symptomatology: A prospective test the diathesis-stress and causal mediation components of the hopelessness theory of depression. *Journal of Personality and Social*

- Psychology* 63, 667-675, 1992.
- 4) 高比良美詠子, 抑うつのホープレスネス理論における領域一致仮説の検討. *心理学研究* 71, 197-204, 2000.
 - 5) Flett, G. L., Hewitt, P. L., Blankstein, K. R., et al., Perfectionism, life events, and depressive symptoms: A test of a diathesis-stress model. *Current Psychology* 14, 112-137, 1995.
 - 6) 坂本真士, 自己注目と抑うつの社会心理学. 東京大学出版会, 1997.
 - 7) Eberhart, N. K., Auerbach, R. P., Bigda-Peyton, J., et al., Maladaptive schemas and depression: Tests of stress generation and diathesis-stress models. *Journal of Social and Clinical Psychology* 30, 75-104, 2011.
 - 8) Andersen, S. M., Schwartz, A. H., Intolerance of ambiguity and depression: A cognitive vulnerability factor linked to hopelessness. *Social Cognition* 10, 271-298, 1992.
 - 9) 友野隆成, 橋本 宰, 抑うつの素質—ストレス・モデルにおける性差の検討: 対人場面におけるあいまいさへの非寛容を認知的脆弱性として. *健康心理学研究* 18, 16-24, 2005.
 - 10) 西村佐彩子, 曖昧さへの態度の多次元構造の検討—曖昧性耐性との比較を通して. *パーソナリティ研究* 15, 183-194, 2007.
 - 11) 高比良美詠子, 対人・達成領域別ライフイベント尺度 (大学生用) の作成と妥当性の検討. *社会心理学研究* 14, 12-24, 1998.
 - 12) 友野隆成, 鹿内美冴, 曖昧さに対するパーソナリティ特性と抑うつの関連性. *宮城学院女子大学研究論文集* 115, 55-65, 2012.
 - 13) 橋本 剛, 対人ストレスサー尺度の開発. *人文論集* 56, 45-71, 2005.
 - 14) Zung, W. W. K., A Self-Rating Depression Scale. *Archives of General Psychiatry* 12, 63-70, 1965.
 - 15) 福田一彦, 小林重雄, 自己評価式抑うつ性尺度の研究. *精神神経学雑誌* 75, 673-679, 1973.
 - 16) 友野隆成, 橋本 宰, 改訂版対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度作成の試み. *パーソナリティ研究* 13, 220-230, 2005.
 - 17) 丹野義彦, エビデンス臨床心理学—認知行動理論の最前線. 日本評論社, 2001.
 - 18) Cohen, J., Cohen, P., *Applied multiple regression/correlation analysis for the behavioral sciences*. 2nd ed. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, 1983.
 - 19) 橋本 剛, ストレスと対人関係. ナカニシヤ出版, 2005.
 - 20) 岡田 努, 現代青年の友人関係に関する新たな尺度の作成: 傷つけ合うことを回避する傾向を中心として. *金沢大学人間科学系研究紀要* 4, 19-34, 2012.
 - 21) 友野隆成, 橋本 宰, あいまいさへの非寛容がストレス事象の認知的評価及びコーピングに与える影響. *性格心理学研究* 11, 24-34, 2002.